

# WINDS CAFE 252 ルドンと音楽

見えぬものの絵画、聴きえぬものの音楽

松本智勇 (レクチャー、Mac) 平井千絵 (ピアノ、1920年製ベヒシュタイン)

2017年12月10日 カーサ・モーツァルト



## プログラム

### 第1部 1840年代、ボルドーの音楽好きの家庭

シューマン 「見知らぬ国から」、「子供の情景」より 1838年作曲、1839年出版  
Robert Schumann, Von Fremden Ländern und Menschen, Kinderszenen Op. 15.

ショパン 舟歌 嬰へ長調 1846年作曲、同年出版  
Frederic Chopin, Barcarolle Fis-Dur, Op. 60.

### インターヴァル 音楽的な絵画

シューマン 予言の鳥ト短調 1849年作曲、1850年出版  
Vogel als Prophet G-Moll, aus Waldszenen Op. 82.

ハイドン アンダンテと変奏曲 へ短調 Hob. XVII: 6 1793年作曲、1799年出版  
Joseph Haydn, Andante & Variations F-Moll, Hob. XVII/6

### 第2部 1910年、フォンフロワドの私的なサロン

セヴラック シューマンへの祈り 1910年頃作曲、1912年出版  
Déodat de Séverac, Invocation à Schumann, En Vacances 1<sup>er</sup> Recueil - 8 Petites pièces romantiques

### セヴラック 鳩たちの水盤

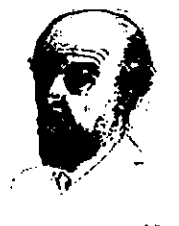
1921年作曲 (死去による中断、ブランシュ・セルヴァ補筆完成)、1922年出版  
Deodat de Severac, La Vasque aux Colombes, En vacances 2<sup>e</sup> Recueil - 3 Petites pièces romantiques

ドビュッシー 前奏曲第2巻から ヒースの荒野 1910-13年作曲、1913年出版  
Claude Debussy, Bruyères, Préludes 2<sup>e</sup> Livre

ファリャ ドビュッシーの墓へのオマージュ (ギター曲) 1920年作曲、同年に出版及びピアノ版編曲  
Manuel de Falla, Hommage, Pour "Le tombeau de Claude Debussy"

オディロン・ルドン Odilon Redon (1840 - 1916)

フランス世紀末の画家、版画家。ボルドーの富裕な葡萄酒主の家に生まれた。ちなみにモネ、チャイコフスキーと同年、セザンヌとシスレーは一つ上、ベルト・モリゾ、ルノワールは一つ下、マラルメは二つ下。1879年石版画集『夢の中で』でデビュー、前半は木炭画と版画「黒」(ノワール)の象徴派的絵画を中心に制作し、1890年を境に色彩に移行する。文学者や音楽家に友人が多い。晩年、南仏ナルボンヌ近郊のフォンフロワド修道院図書室に総決算といえる壁画を制作。1916年パリ郊外のピエーヴルで死去。



ドキュマン

大きな感動を受けたのは、サン・スラン教会の円天井の下で行なわれた、初のコムミュニオンの時です。合唱（グレゴリオ聖歌）が私を感激させたのです。家庭ではいい音楽を多く聞いていましたが、この合唱こそ私の最初に受けた芸術の啓示でした。

ASM\*

幼いころ、揺り籠のなかで私はベートーヴェンとバッハを聴いたのです。私は音の波の上で生まれたのです。歌曲や良質の音楽と結びついていないような幼少時の思い出はありません。もっと大きくなってからは、当時はまだあまり有名ではなかったペルリオーズ、シューマン、ショパンを聴きました。家中がそうした音楽で満たされていました。そのことが私の頭のなかにはっきりとした一本の線を刻んだのです。

Lettre a Edmond Picard, Critique de art, 8/25, 1894.

美しくやさしい船よ、永遠の波に揺られるままに、親しみのある港に浮かんでいる。お前の長い帆柱と細い帆綱は、霧のかかった空に線を描く。そして風の息吹と波のリズムが、やわらかな和声のように心をゆさぶる。

あわただしく入江の岸に向かって来る船がある。遠くに残っている船は、おごそかな帆を下す。そして風の息吹と波のリズムが、やわらかな和声のように心をゆさぶる。

港は祝祭だ。人々は遠くから船を見ている。女がいる。妻、若い娘、二人ずつ岸に立って語っている。そして風の息吹と波のリズムが、やわらかな和声のように心をゆさぶる。

美しく従順な船よ。水夫にとってはかくも大切なお前は、何を船底に持っているのか。大洋の胸から、不滅の泉から得た漁、宝物、獲物は見事だ。そして風の息吹と波のリズムが、やわらかな和声のように心をゆさぶる。

Journal, 1885. 6/12

私は信じる。偉大なる芸術の弟子たちはやがて栄光を授かり、光明と香気と、妙なる調べとで織りなされた天の衣に包まれて、あらゆる調和にみちた神々しい源のただなかに、永遠に姿を消すべく立ち帰るであろう。

タヒチ行きを告げるルドン宛の手紙の一節、ヴァーグナーからの引用、ゴーギャン、1890年

線と色の組み合わせにより、私は言葉の通俗的な意味を表現することではなく、交響曲とハーモニーを表現し、考えを直接表現することではなく、イメージや感情の助けを必要としない、感覚を表現する音楽のように、単に私たちの脳からの神秘的な類似によって、色と線を構成しているのです。

ゴーギャン、手記、1891年

音楽が今日進んで自分にあてがう無表情の仮面は、つまり、おそらくは限りなく表現できないものを表現するという意図を覆い隠していたのだ。音楽は、表現できないもののために作られている、とドビュッシーは言った。だが、明確にしておこう。音楽がわれわれに伝達する神秘は、死の枯渇させる"表現できないもの"ではなくて、生命、自由、そして愛の実りをもたらす"表現できないもの"だ。もっと簡潔に言えば、音楽の神秘は言語に絶するものではなく、筆舌に尽くせないものだ。死の暗い夜は言語に絶するものだが、それは死の暗い夜がふみいることのできない暗闇であり、絶望に導く非存在だからであり、越えることのできない壁がその神秘をわれわれからさえぎるからだ。この点、絶対なにも言うことがなく、人間の理性を押しつぶし、その論述を石と化して人間を無言にするのは、言語に絶する。

そして、筆舌に尽くせないものは、まったく逆に、それについて限りなく、終わることなく言うことがあるから、表現できないのだ。測り知ることのできない神の神秘がそれであり、いみじくも創造の神秘である愛の涙み尽くすことのできない神秘がそれだ。というのは、言語に絶するものが、詩情をすべて凍結して眠りに誘う呪いに似ているなら、筆舌に尽くせないものは、実りをもたらす靈感を吹く込むその特性から、むしろ魅了のように作用する。そして魅了が呪縛と異なるように、筆舌につくせないものは言語に絶するものと異なる。……筆舌に尽くせないものは、人間のうちに、激しい活気を誘発する。筆舌に尽くせないものについては、時の長らが消耗し尽くすまで語り、歌うことがある。それに、これらのことに関しては、すべてが言い尽くされた、とだれが言えよう。いや、ひとつの身よくは終わることのないことばも数知れない音楽も涙み尽くすことはなく、けっして、だれもがすんだとは言えない。この場合には、すること、省察すること、言うことが多い。――言うことが多く、そして、要は、たえずすべてを言うべく！筆舌に尽くせないものにふくまれている約束とともにわれわれに与えられるもの、それは広大な将来の希求だ。ひとはこれらの透明な深さと心喜ばせる意味の十全性とにたえずわけ入る。心喜ばせる意味の十全性は、知性にとって限りなく明瞭でありながら、同様に限りなく曖昧だ。表現できず・筆舌に尽くせないものは、限りなく表現出来るものだ。

ジャンケレヴィッチ、音楽と筆舌に尽くせないもの、仲沢紀雄訳、国文社、1995年、88-90ページ

このメドックの土地で、私の父は葡萄畑のほかに荒地に囲まれた古い領地の所有者でした。荒地には大きな樹木が生え、地面を覆うえにしだやヒース (Bruyères) が屋敷の間近まで迫っていました。

ASM

\*ASM: 私自身に、池辺一郎訳、みすず書房